
騎士の愛するもの

フタトキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

騎士の愛するもの

【Nコード】

N3716Z

【作者名】

フタトキ

【あらすじ】

護るべき人を失った青年は、街中でその少女にそっくりの女性に出会う。二人の出会い是最悪だったが、彼女は青年の仲間の危機を救い、やがて、青年は一国の王を相手にしながら彼女の事情へと巻き込まれて行く。

*他の連載作品『啼く鳥の謳う物語』のサブキャラ達の物語です。ですが、啼く鳥キャラとは一切関係ありません。世界観も変わりません。作者の好きなBL要素もないはずです。

少年と少女（前書き）

この物語は啼く鳥より早くに考えていたものです。なので、啼く鳥の自己紹介文を読んだ人は分かると思いますが、妙に説明が詳しい（？）です。

少年と少女

「どうして…」

雨が激しく降る中で、少年は自らの腕に凭れて目を閉じている少女に呟いた。

「どうして…」

少年は何度も少女に向かって呟く。しかし、少女は相変わらず目を閉じたままだった。

地に座り込む少年に容赦なく叩き付ける雨。俯く少年の表情は見えない。

そして、身動きしない少女。閉じられた瞼はもう開くことはないだろう。

そんな少女の背中からは血が流れ、彼女を抱き締める少年の膝を赤く染まらせる。

流れる血が投げ出された少女の白い手にまで広がった時、少年は空を仰いだ。

「神様……どうしてこの力を俺に授けたのですか。何一つ守ることができないのに……」

少年の目尻から滴が流れる。

そして、

戦場となったこの地で少年は叫び続けた。

流れる時

「あいつは？」

「もう町の中だと思えますが……」

「ハア？あいつの仕事は何だと思っている？」

「護衛です。……団長」

巨大な体の男は身を小さくして言った。そんな大男を震えさせているのは、長い黒髪を後頭部で結った女性だった。そして、彼女の整った美しい顔からは負のオーラが漂っていた。

「で、何故護衛が町にいる……！」

「ひいつ、すみません！」

大男は縮み過ぎて、土下座するような形になっていた。顔を上げたら消されるところでも思っているかのように。

「くっ……口止めされていましたが……… フローラのところへ行く
と……」

彼は震える言葉で必死に伝え、また怒鳴られる覚悟を決めた。

しかし、大男は怒られなかった。

「団長？」

「そうか……分かった」

女性は男に頷いただけで、あっさりと下がらせた。

「ここだったな。……あいつと私が出会ったのは」

女性、つまり、シュヴァルツ商団団長であるシュヴァルツ・リヴァ・コーティは複雑な表情だった。

記憶音

小高い丘に立つ多くの墓石。

そして、無数のそれらの一つの前に、背中から春の太陽の光と温かい風を受け、腰を屈めている人影があった。

「……フローラ・リゼツティア」

その人影は石に刻まれた墓の主の名を呼んだ。

「アレン・レヴァラントは帰ってきました」

焦げ茶の髪を風で揺らし、深いブルーの瞳が細められる。

大人へと成長しつつ、まだ幼さの残る顔。その顔には笑顔がなく、表情は堅く、悲しみが浮かんでいた。

「ごめん……君に会いに来る時は笑って会おうって決めたのに」
アレンはそっと墓石に刻まれた名を撫でた。

「君は昔言ったよね。『憎むなんて言葉は使ってはいけない』と。

じゃあ、復讐という言葉はいいかい？」

アレンの顔が苦痛で歪む。

「屁理屈だね……でも、あいつを許すことはできないよ」

そして、「分かっているだろ」とでも言うように力なく笑った。

それからどれくらい時間が経ったか分からない。アレンの他にも来ていた老婦人が身動き一つせずに立っている彼を心配して声をかけた。

「大丈夫？」

老婦人はアレンの肩に触れ、顔を覗き込んだ。アレンはその声に我に返ると、眼前でじつと見詰めてくる老婦人に慌てて頭を下げた。

「ありがとうございます」

「いえ…私の孫も生きていればあなたと同じくらいの年でして。で

も、体の弱い子だから病で死んでしまつて……今日は孫の命日なんです。だから、あなたをほっておけなくて」

「……すみません」

アレンは喉が詰まる思いをして老婦人に謝つた。彼女はアレンの返事に目を丸くすると、優しく微笑み、しわの入った手をアレンの頭に乘せた。

「謝る必要はないわ。そんなあなたに大切にされているなんて幸せ者ね」

老婦人はアレンの前の墓に年と共に濁つてしまつた瞳を向ける。

「……フローラ」

老婦人の言葉にアレンも最愛の人が眠る場所を見詰め、無意識の内にその人の名前を呼んだ。アレンがフローラと過ごした時間が蘇り、気持ち悪くなる。フローラが笑っている姿を思い出し、足に力がなくなつて膝が地につく。目に焼き付いてしまったフローラの最後が見え、どうしようもない感情が溢れる。

不意にアレンの目許に老婦人の手が触れた。

「まだ若いのに……大きな悲しみを背負っているのですね」

その時、アレンは自分の頬を伝うそれに気付いて老婦人から顔を背ける。

「おや……涙というものは必要です。泣かなくてはいつか自分が壊れてしまいますよ」

「……いえ」

アレンは下を向きながらもできるだけだけ失礼のないように返す。老婦人はそんな彼に気分を悪くせず、彼から手を離した。

「泣きなさい。壊れてしまわないように。あなたにとってフローラさんが大切なように、フローラさんもあなたが大切だと思います。

「………生きなさい」

『生きなさい』

その一言がアレンの頭の中を木霊した。
そして、彼は老婦人の気配が完全になくなると、泣いた。

声もあげずに……。

「『儂き命こそ、その輝きはなにものにも侵されない』ですね」

アレンはフローラの口癖を言うと、目尻に残っていた滴を乱暴に拭いて立ち上がった。

見れば、めそめそしている間に太陽が沈みかけていた。

もう大丈夫だろうか？アレン。

アレンは小さく頷く。

もう、俯く時じゃない。

「帰らないと」

神に祈りを捧げて頂いた手向けの花の存在を思い出したアレンは、それをポケットから取り出した。しかし、それは茎を湿らせて力を失っていた。

「こんなので……ごめん」

他の花に代えたいが、代えればフローラは命を粗末にするなど怒るだろう。腰を屈めてフローラに花を手向けると、アレンは立ち上がって彼女に背を向けた。

「そうだ、フローラ。リアトゼルス教会の取り壊しの件、辞めになつたから」

君が愛したものは俺が守るから。

前後不覚

「俺はシュヴアルツ商団の者だつて……」

アレンの言葉が虚しく響いた。

角石を積み上げ固めた質素で頑丈な小部屋。そこにアレンはいた。照明はなく、腕一本入れるのも困難な小さな窓というより穴から入る月明かりだけが狭い室内を薄暗く照らしていた。そして、季節は春だが、とある事情でコートを奪われた彼にとって夜は極寒であった。

そう、ここは所謂“牢屋”だ。

その一角でアレンは縮こまる。

「だから、俺は商団の者です」

これで何度目かの訴えだが応答なし。というより沈黙。この部屋の構造なのか、牢屋内でしか声が響かない仕様のようだ。忌々しい。

アレンは曲げた膝に顔を埋めると、深く深く溜め息を吐いた。

「団長に殺される……」

フローラへの花を手向けた後、アレンはそろそろ団長の怒りが爆発しかけているだろうと来た道を急いでいた。そこでたまたま目に入ってしまった。

そう、たまたま……。

「……………フローラ!!」

見慣れ、求め続けた彼女の後ろ姿が人々の間から見えた気がした。もう誰の前にも現れるはずのない凜とした彼女の姿だった。

輝きを放つ茶髪。短く切られたそれは見違えるはずがなかった。

アレンはこの世にはいないということを忘れて真っ白になった頭で彼女を追っていた。人混みを掻き分け、謝罪もなしに一心に彼女に

触れようと手を伸ばす。

「フローラ！」

喜びでフローラの名を大声で叫び、目の前の彼女の肩を掴む。彼女はピクリと体を震わせて振り返った。

「フローラ！俺は……」

「……誰？」

その顔はフローラとそっくりだった。しかし、目付き、口調はまったく違った。フローラの愛に満ちた目も声もそれとは真逆であった。だが、アレンにはそんなことは関係がなかった。というより、彼女だと確信して気付かなかった。

「今度こそ俺は……君を守り続ける」

「はい？」

礼儀正しくきつかり頭を下げたアレンの態度に彼女は数歩後退りする。

「一体何なのよ」

「フローラ、君に会いたかった」

その時、アレンはまた後退りした彼女を街中で抱き寄せた。

「なっ！！？」

彼女の口がパクパクと開閉する。そして、

「……………このっ……………このっ……………」

彼女の痺れきった脳が徐々に動き出した。赤く色付いていく頬。絞り出される声は高音域でアレンは益々、フローラと勘違いしていた。更に強く彼女を抱き締める。

「……………このっ……………」

次の瞬間、忠誠を誓った彼女に出会えたと思っていたアレンには信じられないことになった。

この変態野郎!!!!!!!!!!!!!!

怒声と同時にアレンは物凄い力で突き飛ばされた。元騎士でありながら、不様に尻餅を突くアレン。そうなってやっと、彼は気付いた。彼女はフローラではない。

「き、君は……」

彼女は尻尾を釣り上げ、両手を腰に当てて言った。

「私はアクア・マーティリエ。ここパティアの一市民よ！この変態……」

それはそれは驚き。アクアと名乗った彼女はよく見れば、フローラと似ているのは顔だけで雰囲気以前に髪が腰までと長い。そして、彼女はフローラと性格も違った。

「……俺には名前があるのですが」

「ふうん……」そう言うと、突き飛ばされ茫然自失のアレンに上から冷たい視線を向ける。

「じゃあ、名前は？」

アレンはアクアの氷の目線に肩を竦めながらも口を開いた。

「……ア…アレン・レヴァラント」

しかし、誤解を晴らすために名前を言ったのは間違いであった。アレンはここがパティアであり、周辺国にある点で有名であることを思い出すべきだったのだ。

ガチャン。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3716z/>

騎士の愛するもの

2011年12月14日19時46分発行